

I think the issue in crisis management is two-fold.

危機管理の大事な点は、二つあると思います。

two-fold ふたつの要素があります

慣用表現

数詞に -fold をつけることで「～つの要素からなる」という意味になります。「…については～つの要素があります」「…については～つの点があります」と言うときに使われます。

The reason for this is two-fold. (この理由としては、2点あります)

The objective is two-fold. (その目的に関しては2つの点があります)

Well, the first thing is you not only have to know what to do, but you have to appear to know what to do.

一つ目は、やるべきことが分かっているだけでなく、はたからもそのように見えなければならないということです。

The first thing is... 一点目は

パターン表現 **ロジック**

...is two-fold 「2点あります」と冒頭で宣言した後、「1点目は…」、「2点目は…」のように、それぞれの点への「入り口」(= 話の転換点)を示してくれる「旗印」表現もしっかりと聞き取りたいところですね。

ちなみに、このように first, second (序詞) を名詞の前につけて「～番目の点」のように「順序」を言うときは、必ず前に冠詞がつきます (the first thing..., the second thing...).

You have to know ... わかっている必要はない

やまと言葉

have to ... は「～しなければならない」ですが、「選択肢がない」という点にフォーカスが当たった響きが強い表現です。この意味から、「ある目的を達成するためには他に選択肢がない」「絶対にやらなければならない」というニュアンスになると同時に、コンテキスト(相手に対する指図や、自分の具体的な行動について話す場合など)によっては「他に選択肢が存在しない」「嫌でもやるしかない、仕方がない」というニュアンスにもなります。この [聞き取りサンプル] で使われている have to は全て、一般論的な話で、前者のニュアンスになります。

what to do やるべきこと

パターン表現

what to do 「するため (to do) のこと (what)」、「すべきこと」という意味になります。what to ... の名詞のかたまりで、「～こと！」と一単語感覚で馴染んでおきましょう。

what to say 言う(べき) こと

what to write 書く(べき) こと

what to wear 着る(べき) もの

to appear ～しているように見える

やまと言葉

to appear は「外から見て～のように見える」という意味ですので、日本語の発想だと「見た目～だ」の感じになります。

not only ..., but だけでなく... でもある

パターン構文

not only A, but (also) B で「Aだけでなく、Bも」というパターンですね。文頭から、not only ... 「(こっただけじゃなくって...)」 but ... 「(こっちも!)」とイメージをこすりつけながら聞くと、文の構造を見失うことなく聞き進むことができます。

Everybody has to feel that this person knows what to do. It doesn't matter what crisis it is. That's the most important thing.

皆が、『この人はやるべきことがわかっているな』と感じていなければだめです。どんな危機であろうと、同じです。これが最も大事なことです。

It doesn't matterは重要ではない

文法 まず文の構造を確認しておく、It doesn't matter ... の it は「仮置き」の it で、matter 以下 what crisis it is を指します。

やまと言葉 to matter は「重要性を持つ、意味を持つ」という意味です。肯定形では「意味を持つ、大事だ」という意味合いに、否定形では「意味がない、どうでもよい、関係ない」という意味合いになります。ここは「それがどのような危機であるか (what crisis it is) は、重要ではない」という意味になります。

what crisis it is どのような危機であるか

文法 "what crisis is it?" 「それは何の(どんな)危機なのですか?」という疑問文を、「それがどういう危機であるかということ」という名詞のかたまり(名詞節)にしたかたちです。名詞のかたまりにする場合、語順が肯定文の語順になるという決まりがあるため、what crisis it is となります。これで名詞一単語の感覚で文の中で使います。

I want to know [what time the movie starts]. (何時に映画が始まるのかを知りたい)

That's ... それが...

ロジック すぐ前に述べてきたことを that 受けて「で、それが～」というパターンは、とてもよく出てきます。そして特に、前に述べたことの「意味合い」や「重み」などをもう一度ねじ込んでおきたいときによく使われるパターンでもあります。ここもそうですね。That's the most important thing. で「それ(=皆が「この人はすべきことがわかっているな」と感じていること) が、まさに最も重要なことなんです」と、前に言ったことの「重要性(重み)」をもう一度ここで強調してくれています。

The second thing I think is: you have to have an administrative ability or an organizational ability so that you can sort things out to actually implement what it is you know has to happen.

二つ目は、管理能力、組織運用能力を持っていて、やるべきだと信じていることを実際に実現するために事を動かさなければならない

an administrative ability 管理運営能力

やまと言葉 administrative のコアの意味は、「ルールや手順に沿って物事を管理し、実施するような～」という意味です。an administrative ability で、「業務を管理、遂行できる力」を意味します。

an organizational ability 組織運用能力

やまと言葉 to organize とは、「ある目的や行動のために、ものごとを整理し、組織立ったかたちに整える」というのがコアの意味です。organizational はその形容詞形です。an organizational ability とは、「組織や組織のリソースなどをまとめ、目的やビジョンの方向に引っ張り、動かしていくことができる力」を意味します。

...so that ~ そうすれば～になるから

パターン構文 so that は「～するために」(目的)ですので、so that 以下に「確保したい状況、達成したい状況」が続きます。so that ... と聞こえてきたら、「そうすれば～が達成できる」「そうすれば～できる!」、イメージならば「☺!」のように意味を処理する感覚に慣れ、このかたちの文を文頭から処理できるようにしましょう。

ロジック また、so that ... 以下は「達成したい状況」ですから、ほとんどの場合、so that (we) can... 「...できる!」、so that (we) become ... 「...なれる!」のように、プラスの内容が続きます。自分の言ったことの利点を示して説明(サポート)しようとするときに大変よく出てくるかたちですので、so that ...と聞こえてきたら、「あ、利点でサポートしてくれるぞ!」と次を楽しみに待つ感覚で聞くことができるようにしておきましょう。

to sort ... out ...を整える

やまと言葉

to sort ...out で「雑然としたり、混乱しているものを、整理する」という意味です。そこから、「解決する」、「処理する」、「整える」などの意味になります。ここは「状況をきちんと整える、準備する」のような意味合いになります。

to implement 実行する

慣用表現

「計画 (plan)」に対して「実行にうつす・実施する」というときの表現がこの単語です。plan と implementation でセットの感覚で身につけておきましょう。

計画段階 the planning phase

実施段階 the implementation phase

what it is you know has to happen やるべきと信じていること

文法

What is it that (you know) has to happen ? 「起こるべきことだとあなたが分かっていることは何なのか？」という疑問文を、肯定文の語順にすることで what it is that (you know) has to happen 「起こるべきことだとあなたが分かっていること」という名詞のかたまりにしています。ただし、ここでは、I know や I think などが入ることで、本来は省略されることのない主格の関係代名詞 that がよく省略されてしまうという変則的な習慣から、that が省略されています。

馴染みにくい文のつくりですが、基本は what is it ... 「それは何か」とまずは「仮置き」の it で置いておいて、it を that 以下で説明する(it = that 以下) という作りですから、それを基本に慣れましょう。

It's not enough to have the idea " We will ...", I don't know, "launch the lifeboat", but you have to organize the way in which the lifeboat gets launched.

つまり、例えば「救命ボートを下ろす」というアイデアだけではだめで、「下ろす」という作業を計画実行しなければだめだということです。

It's not enough to... ~するだけでは充分でない

やまと言葉

「~するだけでは充分ではない」「~するだけじゃダメだ」という感覚です。その後ろに、but you have to (need to) ... 「(~でけでなく)、~をしなければならない」がセットで来ることが多いです。

I don't know... 例えば

やまと言葉

例をあげようとして考えるときによく使われます。「ん.....何でもいんだけど....例えば」という感覚です。

to launch a lifeboat 救命ボートを水面に下ろす

やまと言葉

to launch A は「目標や標的に向けて A を動かし始める」というのがコアの意味です。そこから「(ミサイルなどを)発射する」、「プロジェクトや事業に着手する」などの意味になります。A が「新しい船」なら「進水させる」、「(救助)ボート」の場合は「水面に下ろす」という意味になります。

to organize the way in which the lifeboat gets launched 救命ボートを下ろすという作業を計画実行する

やまと言葉

to organize the way の way は「やり方」ですから、「(ある目的を達するための)手段、段取り、プロセス、作業」などを広く指すことができます。to organize は「目的や行動のために、組織や方策を整える」という感覚でしたね。ですから、ここは全体で「lifeboat を下ろすために必要な方策を整えなければならない」という意味になります。つまり、「夢やビジョンを単に描くだけでは不十分で、実現のための具体的な段取りがなければならない」というのがこのメッセージです。

パターン表現

このように、the way 「やり方、手段、作業」とシンプルに名詞を置いておいて、後ろから関係代名詞で「どういう作業か」という「詳しい情報」を足してくれる「名詞 + 修飾節」のつくりは、英語で非常によく出てきます。このつくりは、英文解釈的な理解だと「実際に救命ボートを下ろす」作業 (the way) と後ろから前に戻って理解することになってしまうために、聞き取りで苦労するところです。文頭からすっきりと理解できるように、次のようにして慣れておきましょう: organize the way 「やり方をちゃんと整えない」とまず処理しつつ、同時に「ぜったいに、「なんのやり方か」って説明が来るぞ！」と次の情報を楽しみに待ちます。これによって「名詞 + 修飾節」でひとつのかたまりのような感覚で意味をつかんでいけるように練習します。

to get launched (救命ボートが) 下ろされる

文法 直訳的にみると「(救命ボート) が launch された(launched) 状態になる(get)」となります。the lifeboat is launched と単なる [be 動詞 + 受身形(過去分詞)] ではなく、「(ある状態に)する、なる」というところにフォーカスがある get を使って [get + 受身形(過去分詞)] のかたちにする事で、「他からの力、影響で」というニュアンスが微妙に加わります。ここではまさに、段取りの結果として「救命ボートが下される」ことになる感じが、より伝わってきますね。

Otherwise your good idea never actually gets put into practice.

そうでないと、よい考えも実際に実現されずに終わってしまいます。

Otherwise ... そうでないと...

ロジック <A>. Otherwise ~ で、その直前に述べたこと<A>を受けて、「<A>でないならば ~ になる」という意味です。Otherwise 以下には、直前に述べたことをしない場合や満たさない場合に起こり得る、「避けたい結果」が続きますので、otherwise は、直前に述べたことについて、「これがないと、こういうマイナスが起こりますよ、ありますよ」のように、それがいない場合のマイナス面を挙げてサポートするときの「旗印」表現になります。聞き取りの時は、otherwise ... で、「でないと...どういふマイナスなの？」と次を待つ感覚で聞けるようにしておくといいですね。

to put something into practice (何か) を実現する

慣用表現 **やまと言葉** practice のコアの意味は、「(理論などに対して)実際に行くこと」という感覚です。put (something) into practice は決まった言い方で、「(何か)を実行に移す、実現する」の意味です。

So, you've got to have those two things.

ということで、この二つがなければだめです。

So, ... ということで

ロジック So, は自分の論点を説明(サポート)してきた後で、自分の論点(メインポイント)をもう一度言ってくれるときの「旗印」表現でしたね。So,...と聞こえてきたら、「あ、スピーカーが一番言いたいことをここからもう一度言ってくれるぞ！」と次を楽しみに待つ感覚を持ちましょう。

You've got to ... ~ が必要がある、~しなきゃだめだ

慣用表現 主に話し言葉で使われる言い方で、have got to...で have to...とほぼ同じ意味合いで使われます。